

「修士論文作成を振り返って」

福祉心理学専攻 小関 友記（平成 25 年度修了）

昨年度、東北福祉大学通信制大学院福祉心理学専攻を修了することができました。この場を借りて、修士論文の作成過程で特に印象的なことを記したいと思います。

修士論文を作成することは、大学院入学時より研究計画の提出が求められているように、入学時より始まっています。すなわち大学院で何を学びたいのか、何を得たいのかを明確にしておくことが非常に重要です。そこで今、その当時の研究計画を読み直してみたのですが…よくこのような曖昧でかつ煩雑な内容で研究を進めようと思えたなあ、と昔の自分に感心してしまいます。しかし、今こうして、この構想で始めても研究はうまく行かないだろうということがわかるようになっただけでも成長したと言えると思います。

通信制の大学院ですのでレポート課題のテーマに沿って文献を十分に熟読し、自分の現実に沿ってその課題がどのような意味を持っているかをレポートに表し、レポート添削の機会を待つこととなります。安易に答えを得られるよりも、通信指導で十分に考え、文章にして表現し、その推敲を行うという機会は、修士論文の研究構想をより明確にする上でも非常に有用な段階であったと考えています。

また課題やスクーリングに参加し実感できたことなのですが、様々な知識を得るよりも、自分の考えをより深く考える、捉え直す必要があるということです。常に様々な先生方から少ないスクーリングや面接指導の際に「独立因子と従属因子をはっきりさせなさい」と言われ続けてきました。それは人間の心理という目に見えず、様々な影響を受けているであろうものを概念として扱うには、その定義をしっかりと理解し、それに沿って因果関係を十分に考察した上で研究を進めることが大前提なのだ、ということと捉えています。振り返れば、その概念について考え尽くすことが、この研究で最も苦しく、またある程度できるようになってからはとても楽しい時間となりました。

私は専門学校の教員として働いているため、そこにいる学生の学習に対する自信はどこから生まれるのだろうか、それを心理学の分野で少しでも理解できないだろうか、ということの研究構想として持っていました。そして専門学校で教えている内容は脳科学や認知神経学に触れる機会が多く、また大学院 1 年次においてもその概要を勉強する機会を得ることが出来ました。学習への自信は脳の部位のどのような機構によって生まれるのか、その一部でも影響を与えていそうな概念は何なのか…と大学院での研究テーマが実感できた

瞬間は大学院1年次の秋ごろでした。

正直、研究を始めた初期には、仕事などで時間が限られている中で、調査や統計処理、論文の書き上げなどをこなしていくことは非常に困難な道のりに感じられ、気持ちが焦りました。だからこそ、どの時期にどのようなことを終わらせるか、という研究のスケジュールを立てることは非常に重要でした。自分の生活や仕事、研究協力していただく方々の状況を現実的に捉えて、ショートステップで研究作業を細分化していくことで、心理的に余裕を得ることができました。もちろん自分だけでは見落としもありますので、指導教員の先生と、メールや面接指導で様々な相談を行いました。様々なアドバイスをいただいたことで、本当に余裕を持って論文作成を行うことができました。皆川先生にはこの場を借りて御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

あとはそのスケジュールに乗っ取って、コツコツと頭と体と指を動かしていきました。もちろん細かいところで迷うところもあります。しかし時間をおいてから考えを整理してみると解決できました。脳科学的にも、脳細胞が再構成されるには一定の時間が必要です。決して焦らず、自分を追い詰めないことが大事だと学びました。そして、これだけ自分は綿密なスケジュールに乗っ取って動いているのだから、指導教員もいるのだから、きっと研究は成功し、様々な知識と理解が得られると信じていました。自分のやったこと、やろうとしていることを信じるのが最も大事かもしれません。

私の体験談が参考になるかどうかはわかりませんが、これから大学院で研究を始められる方はかけがえのない時間となると思います。皆様の研究の成功を心よりお祈りいたします。